

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：12611

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00768

研究課題名 音楽授業におけるインフォーマル・ラーニングの場で獲得する「学びに向かう力」の検討

研究代表者

中山 由美 (NAKAYAMA, YUMI)

お茶の水女子大学・附属中学校・教諭

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 480,000円

研究成果の概要：本研究は、生徒が自由に学習の目的・内容・方法を考えて取り組み、意図的にインフォーマル・ラーニングの場を授業時間に設定できる題材として、「ミュージック・トーク」を開発し、授業検証した結果、本題材は、インフォーマル・ラーニングが醸成され、自ら選曲した楽曲・演奏のため、分析が細かく丁寧で、主体的かつ個性的な活動となり、プレゼンの方法、話し合いにも工夫がみられ、「学びに向かう力」を引き出せることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

計画的に設計されたフォーマル・ラーニング(公式な学習)に対して、インフォーマル・ラーニングは個人で学ぶ学習のことであり、課題に必要な知識や情報を自主的に調べたり、日常の中で生徒同士が教え合ったりして習得する自発的な学びの機会を指す。「知りたいから知る」「学びたいことを学ぶ」インフォーマル・ラーニングの場を意図的に授業に設定することによって、自発的な意志が学習の動機となる。学習指導要領が育成を目指す資質・能力の三本の柱のうち、「学びに向かう力」を獲得する可能性を検証した本研究は、社会的ニーズに合致すると思われる。

研究分野：中学校音楽科教育

キーワード：音楽授業 インフォーマル・ラーニング 学びに向かう力 音楽鑑賞

## 1. 研究の目的

(1) 本研究は、生徒が自由に学習の目的・内容・方法を考えて進める題材を設定し、意図的にインフォーマル・ラーニングの場を授業時間に設定して学びの実態を解明し、「学びに向かう力」を獲得する可能性を検討することを目的としている。

(2) 本研究では、生徒が一人1台ずつ多機能タブレットを活用することにより、インフォーマル・ラーニングの場面が増え、「学びに向かう力」を獲得する可能性が高くなることを実証することも目的としている。これにより、音楽科における ICT 活用学習の利点を明らかにし、さらなる推進につながると考えた。

## 2. 研究成果

計画的に設計されたフォーマル・ラーニング（公式な学習）に対して、インフォーマル・ラーニングは個人で学ぶ学習のことであり、課題に必要な知識や情報を自主的に調べたり、日常の中で生徒同士が教え合ったりして習得する自発的な学びの機会を指す。

本研究では、主体的に鑑賞活動に取り組む試みとして、題材「ミュージック・トーク」を開発し、実践した。本題材は、“みんなで”聴きたい音楽を生徒一人一人が用意し、少人数グループで一緒に聴き、その音楽の魅力について語り合う活動である。紹介者はみんなで聴きたい音楽を自由に決定し、その音楽の魅力を分析してプレゼンテーションする。聴き手はその説明を聞き、音楽を聴いての感想や気づきを紹介者とともに自由に話し合う。「みんなで一緒に聴きたい」という選曲の観点は、「自分の好きな」という観点とは異なる。聴き手からの反応を意識した選曲となり、他者へ伝える配慮が働いた。

このように、本研究の授業は、授業者が目標や方法、内容を提示する授業形態ではなく、授業者は生徒が自らの力で学べる場と時間を支援する立場となり、生徒にとってインフォーマル・ラーニングの場となった。

授業では、「ミュージック・トーク」のイメージをもたせるため、始めに、授業者がプレゼンテーションを例示したところ、円滑に活動に取りかかることができた。

本研究では、次のことが明らかとなった。

- (1) 生徒の選曲傾向は重なる楽曲がほとんどなく、ジャンルのカテゴライズが困難だった。現代の音楽嗜好が多岐にわたっている、一方で、共通の楽曲をもちにくい状況であることが推察できる。
- (2) 選曲の理由や楽曲の魅力、歌詞分析、背景、音楽を形づくっている8要素（速度・リズム・旋律・音色・テクスチャ・強弱・構成・形式）といった客観的要素から分析するように指示し、分析方法を例示した結果、歌と伴奏に分けて音楽の特徴を捉えようとする活動となった。各自が選曲した楽曲、演奏の魅力を音楽的側面からとらえようとしていた。
- (3) 「学びに向かう力」を獲得したかどうかをみる指標として、授業後の振り返り記述文から、意欲を示す言葉、肯定的な感情を表す言葉、音楽分析に関する具体的な記述を抽出した。その結果、「楽しかった」「おもしろかった」「好きになった」「わかった」「興味深い」「繰り返し聴いた、たくさん聴いた」「発見した、見つけた」「追究する」「深めたい」「よさを伝えたい」「すごいと思った」「気分が上がった、モチベーションが上がった」「知らなかったことを知る楽しさ」「詳しく調べる」「いろいろな観点から注目した」「歌詞を支える音楽そのものを意識して鑑賞できた」「初めて知った」等の記述がみられた。これらの記述から、「学びに向かう力」で支えられた活動となっていたことが判断できる。
- (4) 音源を聴き、分析し、提示資料をつくり、プレゼンテーションを行う生徒の一連の活動では、一人一台の Chromebook を使用し、ロイロノート・スクールを活用することが極めて有効であり、ICT 活用はインフォーマル・ラーニングに不可欠であることがわかった。

以上から、自ら選曲し、楽曲・演奏の分析を設定したことにより、インフォーマル・ラーニングが醸成され、分析が細かく丁寧で、主体的かつ個性的な活動となり、プレゼンテーションの方法、話し合いにも工夫がみられ、「ミュージック・トーク」は「学びに向かう力」を引き出せる題材であることが明らかになった。

「知りたいから知る」「学びたいことを学ぶ」というインフォーマル・ラーニングの場を意図的に授業に設定することによって、自発的な意志が学習の動機となる。学習指導要領が育成を目指す資質・能力の三本の柱のうち、「学びに向かう力」を獲得する可能性を検証した本研究は、社会的ニーズに合致すると考える。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------